勝林寺寺報

憶念弥陀仏本願　自然即時入必定

唯能常称如来号　応報大悲弘誓恩

小惑星探査機“はやぶさ2”が地球から三億4千万キロ離れた小惑星“りゅうぐう”の半径約三メートルの領域にピンポイントで着陸させることに成功したニュースが流れてきました。その努力は想像を絶するものであり、現代科学の進歩にあらためて喜びと感動を覚えました。地球一周が四万、月までが四〇万キロ。それからするとずいぶん遠くにある小さな星のほんの三メートルの領域に、遠隔操作でと着陸させる技術は夢に満ち溢れていました。その研究者や技術者の喜ぶ姿がTVでも報道されていましたが、積み重ねてきた努力の成果であればこそ、成功の喜びは一人勝ち誇ったようなものではなく、仲間と共に築いた喜びであり、三億404千万キロの距離も大宇宙のほんのとっかかりに過ぎないことを知った上での謙虚な喜びに見えました。宇宙はとてつもなく広いようです。太陽系があり、銀河系があり、そのもっと遠くがあり・・・。私にはその説明はよくわかりませんが、よくわかっている科学者たちはその広大さが見えているのです。

そしてまたこのプロジェクトは、地球の生命誕生の謎を探るためのものだそうです。これにも驚かされましたが、この小さな惑星に地球の生命誕生の謎を解くカギがあるのだそうです。生命とは何か？命とは何か？生命科学といえば研究室の中で顕微鏡をのぞき込んで探るものだと思っていましたが、研究者の尽き果てない探求心は、宇宙のはてを知ろうとする思いに通じているようです。この生命科学も近年目覚ましく進歩していますが、これもまたほんのとっかかりに過ぎないのだと、研究者たちは知っているのです。自然を知れば知るほど命の謎は深まっていくようです。自然科学を学んだ方々とは次元が違いますが、私なりにもキャベツについた青虫が美しい蝶になるのは不思議ですし、一億もの精子のたった一つが卵子と出会い、一つの命となるのも根源的な不思議です。

研究者はこれからも宇宙の謎、生命の謎を探り、人間の科学を少しずつ進歩させていくことでしょう。その業績は素晴らしいものでありますが、研究者たちが一番知っているように、それはほんのとっかかりに過ぎず、真の不思議を解くには到底及ばないものです。

親鸞聖人は「弥陀仏は自然のやうをしらせん料なり。」と晩年述べられ、広大な宇宙の謎も、小さな命の誕生の不思議も、お念仏によって真に知っていく方法を示されました。阿弥陀さまの御名を称えることで、よりよく自然に出会い、よりよく自然を知ることができることを知っている私たちは、科学者の皆さんより進んでいるのです。

（文責　住職）

葬儀
二月十六日
奥小谷　陰山克己様　九十二才

彼岸会のご案内

雪の少ない冬でしたが、やはり春の訪れはうきうきしてうれしいものです。道中の梅や桃、フキノトウや水仙を見ながら勝林寺まで足を延ばし、仏様とのご縁におあいください。お待ちしています。

日時　平成三十一年三月二十一日（木）　春分の日
午後二時より
内容　お勤め　「正信偈」
法話　当山住職　西池　匡紹

仏教婦人会総会・物故者追悼法要

年に一回、婦人会会員が一堂に会し、御念仏に出会い、親睦を深め、心休まる時間を共有する機会です。ぜひ、ご参加ください。

日時　平成三十一年三月二十一日（木）
午前　九時半より

日程
九時　受付
九時半　開会行事
一〇時　報告総会
一〇時半　物故者追悼法要
一一時　記念法話
一一時三〇分　アトラクション　邦楽のひととき
一二時一〇分　昼食懇親会
一三時十〇分　閉会

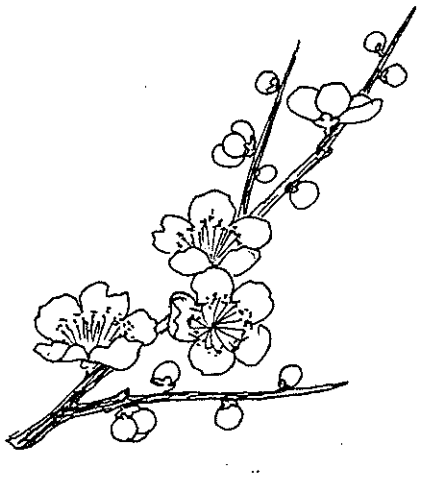
＊十四時からは、彼岸会が勤まります。
＊参加申し込みは、地区仏婦評議員さんへ。

作品展のご案内

三月　勝林寺　予定

二日（土）　山田輝幸宅　一周忌
三日（日）　長谷川進宅　忌明法要
四日（月）　兼井元三郎宅　三回忌
五日（火）　数森好章宅　五〇回忌
七日（木）　田中重雄宅　遷仏法要
八日（金）　兵庫教区　教区会常備委員会
九日（土）　永井道則宅　一周忌
十日（日）　光顕寺　前住職七回忌法要
二一日（木）　勝林寺婦人会　総会
彼岸会・合同役員会
二五日（月）　永井正子宅　三回忌
二六日（火）　兵庫教区　教区会
みのりを聞く会
三十日（土）　出石組　組内会
三一日（日）　蔭山文子宅　忌明法要

（敬称略）



個別性を大切に

かつて近代以前の日本の社会は、すべてが世襲主義の世の中でした。武士の子どもはどれほど能力がなくても武士になれ、農家に生まれた子どもは、その生涯を通じて、農業に生きていくほかに道はありませんでした。わずかな例外はあったとしても、古い封建時代の社会は、そういう世襲制度が徹底しておりました。

ところが近代、明治以降になると、そういう世襲制度が崩れて、今までの門閥や血統に関係なく、能力あるものは、いかなる地位にも昇ることができるという、能力主義の社会になってきました。ことに近代の日本は富国強兵の路線をすすみましたので、才能あるものは無一文から成功して、巨万の富を築くものもあらわれましたし、また軍隊に進んで、無名の家柄から陸軍大将、海軍大将という、輝かしい栄誉を身にうるものも生まれてきました。かくして近代以降は、能力主義が徹底していき、誰でも彼でもみんなそれなりの夢をえがいて、賢明に努力するようになってきました。そしてそのような能力主義の徹底は、やがて厳しい競争社会を生み出すことと成りました。

ことにそのことは、戦後一般の生活水準が向上するにともない、高学歴社会が生まれてきますと、就職競争が激化し、その能力主義はいっそう深刻になってきました。ことに今日においては、このような競争原理が公教育や家庭教育の中にまで持ち込まれてきましたが、もともと教育というものには、競争原理はなじみません。人間の尊厳性が平等に保証される環境の中においてこそ、子どもたちは、はじめて多くの事を学ぶことができ、また人格的にも成長をとげていくことができるのです。今日さまざまな社会問題をおこす若者たちを思うとき、このような競争原理の弊害が、その幼い魂に傷をつけたのではないかと考えずにはおれません。

これからの時代、世界は、そういう能力主義、競争原理によることなく、個別主義を大切にし、そしてそれぞれが異質のままにも共存、共生していくという、新しい原理を確立していくべきだと思います。人間一人一人が、そしてそれぞれの組織が、そしてそれぞれの民族、国家が、その個別性を尊重され、それを発展させていくことが肝要です。かつて日本の政府が、規制緩和という美名のもとに、大企業を優遇して中小企業を軽視したこと、大資本の巨大マーケットを優先して個人商店を排除したことは、大きな錯誤でした。中小企業が元気になり各地の商店街が賑わってこそ、日本は豊かとなり、また私たちの生活も向上してくるのです。それぞれが個別的でありながらも、どこかでは共存、共生する、これからの時代、世界とは、そうあるべきだと思うことです。

（信楽峻麿遺稿法語集より引用）

法語カレンダー三月

われらは 善人にもあらず 賢人にもあらず

電車に乗ると、座席が空いていて座ることが出来ました。「あー、座れてよかった」と思っていると、停まる駅ごとに段々混んできました。私よりお年を召された方が、私の前にお立ちになりました。私は黙って席をお譲りしました。扉付近に移動して、こんなことを考えていました。「きっと、みんな、私が席を譲った様子をご覧になって、あぁ、なんてスマートな紳士なんだろう！と思ってみているのだろうなぁ」

私たちは、自分が成し得たことを、認めてもらいたい、褒めてもらいたいという思いが心の中に渦巻いています。阿弥陀さまはそのような、私のもともと持っている本性を見抜いてくださって、「そんなあなたをこそ救おう」とおっしゃいました。このお救いをいただいた上には、善いことをした、すばらしいことをなし得たと思っていても、「でも、本当の意味では最善ではないんだよ、十分ではないんだよ」と、そのことを知らされています。するとそこには、「これじゃあ申し訳ない、もう少し・・もうちょっと・・」と、さらに努め励んでいくモチベーション（動機）を持たせていただくことになります。阿弥陀さまのお救いには、私の努力は一切不要です。でも、そのお救いをいただいた私たちは、救われた上には「せめて・・」「もう少し・・」と努め励んでいこうとする心をいただくのです。

私のもっているもともとの心は、自慢するのが好きで、しんどいことは怠りがちな心です。こんな私の心のままではなく、自らすすんで行おうとする「たしなむ心」もいただくのです。これが浄土真宗・阿弥陀さまのお救いです。

（葛野洋明「心に響くことば」より抜粋）

どすん

化粧石鹸を一年半かけて最後まで使い切ったら、ほんの小さな自信が付いたと前回の「どすん」で紹介しました。いつも寺報を楽しみにしているといってくださるお隣のおばちゃんが「今回のどすんの話おもしろかったわー」と、いつも以上に褒めてくださいました。すっかり気をよくして、二月の仏婦評議員会でこんな提案をさせていただきました。

「どんな事でも、続けてやりきると自分だけの喜びと自信が持てますよ。でも、いきなり一年半は長いといわれる方に、まずは、一三〇日（四カ月余り）続けることに挑戦してみませんか？実は、勝林寺が、お参りのお礼にいつもお渡しするマッチは、ひと箱に一三〇本くらい入っています。これを、毎朝、一本ずつ使うのです。仏さまの前で、線香に火をつけるために。できれば手を合わせ「南無阿弥陀仏」と声に出します。多分、時間にして一分あれば十分です。お線香の良い香りに包まれ、新しい一日に灯りがともり、よいスタートにもなります。最初の頃は、使っても使っても減っていく気がしなくて、ゴールが遠い気がしますが、そこを乗り切ると、次第にマッチを使うことが目的ではなくなってくるようです。明日から始めたら、七月くらいに箱は空っぽになるはずです。きっとその時、満面の笑顔と小さなガッツポーズが出ると思いますよ。私、意外にやるじゃない！って（笑）。マッチは勝林寺に売るほどありますから、喜んでいくらでもお分けいたします。」

先日、お参りにみえたご門徒さんに、いつものようにお礼のマッチをお渡しすると「坊守さんのお話を聞いて、母と毎朝使っています。」とおっしゃってくださいます。うれしいな。七月、いや、これを読んで「やってみよう」と思われる方もあるだろうから、八月、勝林寺のマッチは底をつくかもしれませんね（笑）（文責　坊守）